

特集 「家族」に寄せて

吉 井 秀 夫

二〇一五年の史学研究会例会は、四月一八日に「家族」を共通テーマとして開催された。今回も多くの方々に参加していただいたことをまず感謝申し上げたい。本号は、当日の報告者および紙上参加をお願いした方々から寄せられた六編の論説からなる。例会での報告および各論考を一読させていただいた所感を述べることで、巻頭言にかえさせていただきたい。

栗原論説は、古典期アテナイにおけるオイコスが、ポリス法制上の構成単位とみなしうるかを、民衆法廷でのやりとりをもとに検討する。下倉論説は、「識劫嬖案」簡をとりあげながら、中国古代の「家族」にかかわる諸問題点を検討する。両論説を読む中で、地域や時代が異なるどのような社会においても、「家族」をめぐる争い、特にさまざま「相続」をめぐる争いが出てきたことを再確認させられた。また、現実生活において私達は平穏な家庭生活を望むものであるが、皮肉もそうした争いの記録こそが、「家族」の抱える諸問題を考える上での重要な手がかりとなることを両論説は示している。

清家論説は、中丹波地域における古墳副葬品の分析を通して、古墳時代中期・後期を通して父系化は進むものの、それは貫徹しなかった、という自説の補強を試みる。もつとも、筆者自身が指摘している通り、モノを通して研究を進める考古学においては、「家族」の争いや詳細な関係はもちろんのこと、その基本原理を説明することでさえ、さまざまな困難を伴う。先の二論説と比較して読む時、そうした限界をあらためて感じざるを得ない。その一方で、文字記録を通して「家族」のあり方が明らかになっている地域における墓制研究を進め、その成果を参照することで、考古資料の解釈の幅

を広めていけないか、とも考えさせられた。

金井論説では、日本中世における北政所の地位が、婚姻形態の変化だけではなく、朝廷・公家社会との関係の中でどのように変化していったかが検討される。並河論説では、イギリス領西インド植民地社会において進められた奴隷女性と「家族」との関係を変えていこうとする奴隷制改善運動の展開と、その実態が検討された。湯澤論説では、都市化・工業化が進んだ二〇世紀はじめの愛知県における農家の暮らしとその変化が検討される。これら三論説は、「家族」のあり方が、その時々 of 的 的 な 要 因 と の つ な が り に よ っ て ど の よ う に 左 右 さ れ た の か を 検 討 し た 点 が 共 通 し て い る と い え よ う。

今回の例会報告を聴き、論説を読ませていただきながら、私は家族史をめぐってさまざまな視角から研究がなされていることを学んだ。その一方で、時間・空間を越えて共通する問題が存在することも知ることができた。「家族」をめぐる諸問題は、現在を生きる私達にとっても、切り離すことができないものとして存在している。本号の論説を通読していただく中で、過去・現在・未来を貫く「家族」の問題を考えていく上でのさまざまな手がかりを見いだしていただければ幸いである。

(本会常務理事)